

[社 会]

## 地域に対する既存の知識と歴史的事象を繋ぎ、 多角的な視点から思考する児童の育成

—身近な地域素材を活用した小学校社会科歴史授業の実践を通して—

棚橋 幸平\*

### 1 はじめに

筆者が赴任した当初、児童から地域の歴史上の偉人や誇るべき場所について教えてもらったことを記憶している。一人の児童から複数の児童へと地域の話は膨らんでいった。児童は、自分の住む地域についてよく知っているのだと感じる機会があった。これまでの生活経験から地域に関する知識があり、思考する際の起点として活用できる能力である。小学校学習指導要領解説社会編では、教科目標として掲げる社会的な見方・考え方に関連する記述がある。社会的な事象を位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係に着目して捉え、比較・分類、総合したり地域の人々や国民生活と関連付けたりすることと整理されている。つまり、教師が児童に対し、授業で出会う社会的な事象についてどのような視点を与えどのように思考させるか、これまでの知識と関連付けさせるかが求められているといえる。

小学校第6学年での歴史学習の単元においては、その時代の為政者や文化に影響を与えた人物、政治が行われた舞台を中心に学ぶ。しかし、児童と歴史的事象との距離はかけ離れてしまっている。その結果、歴史学習は「覚えることが多い教科だ」、「自分の生活には関係ない」という意識を児童がもつことに繋がってしまう。児童が歴史的事象を自分事として考えられないことが問題として挙げられる。これまでの教育実践研究において、歴史的事象を自分事とするための手立ての有効性が検証されている。松岡(2005)は、地域の社会生活と関わりの大きい歴史的事象として城下町高田を取り上げ、地域素材で児童に実感をもたせ、対話を核とした学習活動を行っている。丸山(2022)は、社会や世界の現状を自分事として捉えることで課題意識をもたせ、仲間と共有し、解決に向けた学習に取り組ませた。SDGsの17のアイコンを活用した整理・価値付け活動を行い、歴史的事象を自分たちの生活と関わらせ、多角的な視点から、課題を解決する実践を行っている。

本実践では、小学校6年生の歴史学習の単元において、地域素材を用い、多角的な視点から歴史的事象を考察させることで自分事として捉えさせることをねらう。さらに、児童がもつ地域に対する既存の知識と新たに出会う歴史的事象を繋ぎ合わせながら概念的な知識を形成できるようにしていきたい。

### 2 研究の概要

#### (1) 研究の目的

本研究の目的は、児童が歴史的事象を自分事として捉え、地域に対する既存の知識を繋ぎ合わせながら概念的な知識を形成するためにはどのような学習の手立てが有効であるか実践を通して考察することを目的とする。

そのために、次の三つの手立てを講じ、その有効性を検証する。

#### (2) 研究の手立て

##### ① 児童と歴史的事象との距離を近づける地域素材の活用

児童と歴史的事象との距離を近づけるために、校区内の身近に感じる地域素材を取り上げる。堀田(2018)は、歴史認識を主体的に獲得させるためには過去に生きた「民衆たち」の具体的な姿を掘り起こすことが大切であると述べる。資料を様々な視点(人・物・場所等)から読み取らせることで歴史的事象の意味や地域とのつながりを感じることができ、児童がもつ地域に対する既存の知識が繋がる資料を基に考えさせる。

##### ② 多角的な視点から読み取った歴史的事象の意味を深めるための話し合う場の設定

田村(2017)は、児童は対話を通し、別々の事実に基づく知識を繋ぎ、言葉を駆使して、多くの知識や情報を繋ぎ、知識

\*南魚沼市立六日町小学校

や認識の質を高めるとしている。また、知識は関連付けられたり組み合わせられたりして、構造化「ネットワーク化」され、個別のピースがつながり、知識の階層は質的に高まり概念的知識が形成されると述べる。他者との話し合いを通し、多様な視点から考えを広げられるようにする。

### ③ これまでに獲得した知識を総合し、歴史的事象に対する捉えを自覚化させるための書く活動の設定

児童は、これまでに様々な知識を積み重ねている。既存する知識や学んだ知識を総合させ、新たな見方や考え方を創造していく。自分自身の歴史的事象に対する捉えを自覚化させるために、扱った地域素材と教科書の歴史的事象を関連付け、書く活動を設定する。

## 3 実践Ⅰの実際

### (1) 単元名 幕府の政治と人々の暮らし

(2) 目標 江戸幕府の政治の特色や世の中の様子、人物の働きについて学習することを通して参勤交代や鎖国などの幕府の政策、身分制度について理解し、武士の政治が安定した理由について考えることができる。

### (3) 教材について

本単元は、戦乱の世の中から江戸幕府が全国各地の大名を支配し、武士による政治が安定した要因について考える学習である。児童は、これまでに天皇中心の政治や貴族や武士による政治が行われてきたことについて学習してきた。これまでの時代との相違点として戦乱のない安定した平和な世の中が長い期間続いたこと、全国各地にまで支配が及び、全国各地で共通の政策が行われていたことが挙げられる。児童が生活する地域においても幕府の政策が関係しており、影響が及んでいたのではないかと関連付けながら歴史的事象を捉えさせたい。

### (4) 単元計画 (全8時間)

次	時	学習内容	評価
1	2	大名行列の想像図から、幕府と大名、地域の人々との関わりについて、幕府はどのようにして世の中を治めたか学習課題を立て、幕府の大名を支配するための政策について調べる。	幕府が強い力で全国の名目を支配するためにどのような政策を行っていたのか調べる意欲をもつ。【ノート・シート】
2	1	村や町に住む人々が、身分制度の下で、どのような暮らしをしていたかについて読み取り、百姓の年貢が幕府の政治を支えていたことを捉える。	百姓の暮らしの様子から、身分ごとに役割が決められ、武士の政治を支えていたことを捉えている。【ノート・シート】
3	2	江戸幕府が鎖国政策を行うまでの経緯を知り、鎖国政策に踏み切った要因について考える。また、鎖国政策のもとでも交易や交流があったことを調べる。	幕府が鎖国に踏み切った経緯を理解し、政策の影響について考える。【ノート・シート】
4	3	江戸時代の産業と交通を幕府・藩の政策と関連付け、江戸時代の六日町について考える。歴史の舞台を歩き、地域の方から話を聞き、江戸時代の六日町と幕府の政策を関連付け、自分の考えをまとめる。	江戸時代の幕府の政策と六日町の様子について関連付けながら自分の考えをまとめる。【ノート・シート】

### (5) 指導の実際 第1次、第4次を詳述する。



写真1 三国・清水街道史跡

第1次では、導入として大名行列の想像図の読み取りを行った。気付いたことや思ったことについて率直に意見を出させた。「なぜ、大勢で歩いているのだろう。」や「なぜ、戦いに行くような格好をして歩いているのか。」「雪が降っていないから、季節は春かな。」などの意見が出た。校区内には、当時の三国街道と清水街道の分岐点に史跡が建てられている(写真1)。三国街道は、江戸と越後を結ぶ交通路であったことを確認した。「見たことがある。」「通学路だから毎日通る。」という児童の声が上がった。史跡の文字に着目し、追分という文字から道の分岐点であったことを確認した。三国街道という言葉を知っている児童も多くいた。街道という言葉をもとに一人1台端末で調べると江戸時代に人々が通っていた道であると知り、六日町もこの絵に関係しているのではないかと考える児童もいた。次に、幕府の大名配置の意図や武家諸法度の内容を確認した。家光の時には、参勤交代の制度が追加されたことを知り、幕府が大名を強い力で統制していったことを読み取った。幕府側、大名側の立場に立たせ、参勤交代の制度に対する思いについて考えさせた。

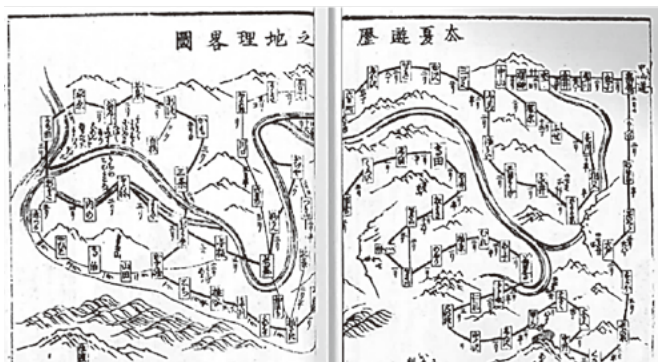


図1 十返舎一九遊歴図



図2 十返舎一九速船下り

第4次、第1時では江戸時代に十返舎一九が全国各地を遊歴し、訪ねた地域の様子について描いた挿絵を基に授業を展開した。最初に遊歴図(図1)を提示した。児童は、江戸時代から六日町という地名やその他にも知っている地名があることに驚いている様子が見られた。六日町から長岡、さらには新潟、佐渡にまでつながる道があったことについて捉えた。さらに、旅の遊歴の解説からキーワードを確認した。くずし字に関心をもつ児童もいた。六日町宿という言葉から、「泊まる場所があったのではないか。」や「魚野川を川舟で移動していた。」といった考えが出た。また、現代も旅館や温泉があることと関連付けながら江戸時代の生活の一部が今に繋がっているのではないかと当時を想像する児童も見られた。次に、六日町の様子について描いた資料(図2)を提示した。

舟にたくさんの人たちが乗っている様子から「旅行をしているのではないか。」や「魚野川で採れた魚を売っている。」、「積んでいる荷物は米なのではないか。」といった意見が上がった。児童は、十返舎一九の描いた江戸時代の六日町と現在の六日町を比較、関連付けながら考えた。第2時では、当時の三国街道を歩き、川舟展示室「こうりんぼうの館」での現地学習を行った。地域の「魚野川の川舟を復元する会」の方から協力をしていただき当時の川舟の様子について説明してもらった。川舟の歴史は古く、上杉家が支配していた室町時代から運行されていたことや三国街道を歩くよりも六日町から川舟に乗ることで長岡までの到着時間が短縮されたことを聞き取り、進んでメモをとる児童が多くいた。展示されている各種資料についてもこれまでに学んだことはないかと調べようとしていた。十返舎一九の名前があり、関心をもった児童が多くいた。実際に六日町を訪れ、川舟に乗っていたことを確認した。また、復元され展示されている川舟には多くの米俵が積んであり、年貢米としての輸送や魚や野菜、木炭といった幅広いものが川舟で運搬されていたことを聞いた。当時は、物流の拠点になっていたことを捉えた。また、参勤交代の大名や佐渡奉行といった人たちも川舟を利用し、江戸や佐渡を目指していたことを聞き、交通の要衝であったことも捉えた。第3時では、江戸時代、六日町はどのような町であったのか幕府の政策と関連付けながら班員と考えを伝え合い、自分の考えをまとめた。



写真2 こうりんぼうの館での現地学習

(6) 実践Iを通しての考察

### ① 児童と歴史的事象との距離を近づける地域素材の活用

児童にとって身近な校区内での歴史的事象を取り上げたことで、自分たちの住む地域も歴史の大切な舞台であったと肯定的に捉え、学習に意欲的に取り組むことに繋がった。また、実際に町を歩き、地域の方から話を聞くことで当時は交通の要衝であったことを捉えることができた。参勤交代や年貢米など教科書の言葉と地域素材を関連付けながら歴史的な事象を考えることに繋がった。

### ② 多角的な視点から読み取った歴史的事象の意味を深めるための話し合う活動の設定

地域素材から多様な視点を持ち、友達と話し合うことで、当時の六日町の様子から全国を支配した幕府の意図について考えていた。例えば、佐渡という言葉から幕府は佐渡金山を直轄地として管理していた重要な場所であることを話し合っていた。川舟を使って佐渡まで向かい、金の輸送や調査をしていたのではないかと想像していた。また、六日町宿という言葉から、江戸に向かう大名にとっては金銭面で負担が大きかったことが考えられるが、当時の地域の人々にとっては、経済面で効果があったのではないかと考える班もあった。挿絵の酒と肴、餅を売る様子からである。にぎわ

いのある町で観光客がたくさん訪れていたと考える児童もいた。現在も温泉や旅館が多いことから当時からの名残なのではないかと想起する児童もいた。多角的な視点から歴史的事象を見つめ、友達と話し合うことで自分の考えをより明確にし、さらに新たな視点から気付きを得ようとしていた。

### ③ これまでに獲得した知識を総合し、歴史的事象に対する捉えを自覚化させるための書く活動の設定

歴史学習に特に肯定的でなかった抽出児童の記述を取り上げ、知識の繋がりについて分析する。いずれの児童も歴史は覚えることが多いという意識を感じている児童である。

児童A	児童B	児童C
いろいろな写真や図、絵から考えて、六日町は意外と重要なことに驚きました。三国街道や清水街道は大名や旅行者が通っていて川舟も通っていたから栄えていった理由を知ることができました。	江戸時代の六日町は有名な人も来てたくさんの方が訪れて栄えていた町だったのだなと思いました。温泉があったり宿があったりたくさんの方が来っていたのだなと思いました。にぎやかで栄えていた町なのだと考えました。	六日町の昔のことは知らなかったけれど、六日町が重要なところだったと分かりました。新潟県には、佐渡金山があったから三国街道は通過点になっていて徳川家にとっても大事な場所だったのだと思いました。

六日町を起点にし、学んで得た知識や友達との話合いを通して新たに得た知識、既存する知識を結び付けながら考えようとしていた。3人の記述を見ると徳川家、大名といった用語を使いながら自分の考えをまとめていた。児童がもつ既存する知識と幕府の政策を関連付けて思考する様子が見られた。しかし、概念的知識としての江戸時代が260年以上という長い間続いた要因として挙げられる政治の安定についての記述ではなく、江戸時代の六日町の発展といった視点からの記述である。単元全体を通してからの記述ではなく、第4次からの記述に留まってしまったことが反省点である。

## 4 実践Ⅱの実際

### (1) 単元名 戦争と人々の暮らし

(2) 目標 地域の当時の写真や戦争体験記を手がかりにしながら、戦争が各地へ拡大し、大きな被害をもたらしたことについて理解し、当時の世の中の様子や人々の生活から戦争の悲惨さについて考える。

### (3) 教材について

日中戦争、太平洋戦争の開戦から終戦までを年表を用い、長い間戦時下が続いていた背景を捉える。戦争により国民は大きな被害を受け、戦時中の暮らしの変化や世の中の様子について地域資料を基に考えさせる。地方にも被害が及んだことについて考えを巡らせる。自分の住む身近な地域での戦時下の様子について考えることを通して、戦争の悲惨さや当時の人々の思いについて考える。

### (4) 単元計画

次	時	学習内容	評価
1	1	長岡空襲の様子から、戦時中はどのような暮らしをしていたのか学習課題を設定する。	戦争が起きた背景や戦時下の暮らしについて調べようとする意欲をもつ。【ノート】
2	2	日中戦争から太平洋戦争の開戦へと戦時下の世の中の人々の暮らしを調べる。戦争がアジア、太平洋へと広い範囲に拡大していった経緯を調べ、その影響について考える。	日中戦争、太平洋戦争など戦争が拡大した経緯を捉え、国民生活に影響を与えたことを考えている。【ノート・シート】
3	2	戦争が人々の暮らしに与えた影響について地域素材をもとに当時の様子を捉え、戦時中の暮らしについて考える。	戦争が激しくなり、人々の生活にも大きな影響があったことを捉える。【シート】
4	1	沖縄戦や広島・長崎への原爆投下を調べ、終戦について、人々の思いについて考える。	戦争に対する自分の思いを表現している。【シート】

## (5) 指導の実際 第3次について詳述する。

表1 第3次 児童への配付資料

○当時の地域の様子を伝える写真			
ページ	『写真集 ふるさとの百年 南魚沼』, 新潟日報社	ページ	『ふるさとの思い出写真集 明治大正昭和 六日町・塩沢』 林明男, 池田亨, 国書刊行会, 1983より
147	①子供たちの遊びチャンバラゴッコ	75	①航空少年隊員の滑空訓練 ②グライダー訓練場作り
151	②凱旋兵を迎えた六日町駅頭	109	③坂戸山における実科女学校生徒の実弾射撃演習
152	③模擬市街戦時の閲兵	112	④戦争を報道する新聞と黒板を見る高等女学校生
○当時の地域の様子を伝える記述			
ページ	『戦争体験記-戦後六十余年を生き永えて-』, 大月朋蚩会, 2007より		
3	生産用品の物資も工場復興ならず生産も出来ずに不足が続く、配給切符制で、その上更にくじ引きをして配分を決めた。マッチやタバコ等は箱単位でなく一本単位であった。冬の間、女性は高機織を業としていて寝る間も惜しんで作業をし、家業の主力現金収入であった。		
28 29	昭和16年、小学校にも芋、大豆、草刈り、雪掘りあらゆる過労な勤労作業が、学習活動の中に課せられるようになった。出兵兵士を見送る日々、国内は人手不足、食糧不足、物資の欠乏、非農家の人たちは、リュックサックを背負い買い出しによって命をつなぐ。米不足で芋類は貴重な食べ物、さつまいもの茎、食べられる草はすべて、ご飯、お雑炊の糧となった。神奈川県茅ヶ崎の養護学校から100名疎開してきた。子供達は親から離れ、なれない土地で本堂が宿舎であり、学習の場となった。朝は田んぼでいご取り。終戦後も食糧難解除とはならず、こたつの炭火でご飯をたき、町から探し求めた魚を焼いて食べるのが楽しみだった。		

第1次で設定した学習課題「日本が戦った戦争によって人々の暮らしはようになったか」を受け、第3次の第1時では戦時中の暮らしの様子を調べ、戦争が人々の暮らしに与えた影響について考えた。教科書から「ぜいたくは敵だ」など当時の標語は国民を一つにまとめ、戦争に協力させるためのものであったことを捉えた。食料や燃料などの生活必需品が不足し、切符制や配給制となったことや金属類は回収され、戦争に協力せざるを得ない状況となっていったことを捉えた。子どもたちも戦争に関わらなければならず、苦しい思いをしていたことや報道・出版統制により正しい情報を得ることすらできなかったことで国民が操作されていたと考える児童もいた。第2時では、戦時下の六日町の人々の生活について当時の写真をもとに考えさせた。資料を読み取る前に予想をさせた。六日町は、「米の産地だから食料での影響は少なかったはずだ」などの予想をしていた。戦争体験記の記述や当時の写真から当時の人々の生活について考えた。資料を読み取り、暮らしに与えた影響について、それぞれの視点を持ち、戦時下での暮らしの状況を捉えた。

## (6) 実践Ⅱを通しての考察

## ① 児童と歴史的事象との距離を近づける地域素材の活用

資料から年代の近い子供達の日常生活について思いを巡らせて考える様子が見られた。身近な山が訓練場として利用されていたり模擬市街戦が行われていたりすることに驚く児童が多くいた。また、切符制や配給制といった教科書に記載されていることと関連付け、地方にも戦争の影響があったことについて自分事として考えることに繋がった。

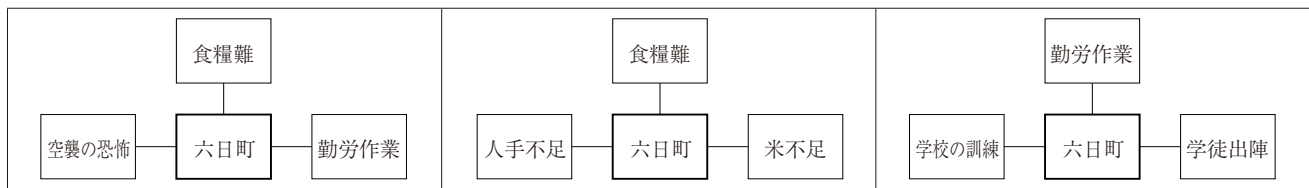
## ② 多角的な視点から読み取った歴史的事象の意味を深めるための話し合う活動の設定

もし、その時代に自分がいたらと班での話し合いを進めた。労働に視点を置いた児童は、出兵する男性、残った女性、子供とそれぞれの立場から当時の暮らしの様子について伝えようとする姿が見られた。多様な人達の視点に立ち、自分事として歴史的な事象を捉え、戦争の悲惨さや地域にもたらした影響について話し合った。

## ③ これまでに獲得した知識を総合し、歴史的な事象に対する捉えを自覚化させるための書く活動の設定

実践Ⅰと同様の抽出児童の記述を取り上げ、知識の繋がりについて分析する。

児童A	児童B	児童C
毎日空襲におびえながら過酷な勤労作業をしているのは体力的にも精神的にも大変だったと思います。ご飯も満足に食べられず苦しい生活に耐えることができたのは国が勝つと信じていて国のためになろうという意志からだと思いました。	六日町の人々は大変な思いをしていました。戦争で人手不足の中、たくさんの時間をかけて女性と子どもたちで協力して生活をしてきたからです。食べ物も米が不足し芋などしか食べられず辛い日々を過ごしてきた過去があって今があると思いました。	六日町の人たちは辛い気持ちだったと思いました。男の人たちはみんな出兵して子どもも学校の授業で訓練して勤労作業もしなければならなかったからです。自分の子どもが戦地へ行き、苦しい思いをすることが悔しいし、憎いと思いました。



3人とも戦時下の暮らしについて地域資料からの読み取りを基にして当時の様子を捉えている。様々な人々の視点に立ち、戦争に対する思いや当時の苦しい生活について自分の考えを記述している。当時の子供達の勤労作業や食料不足といった資料は児童にとって実感しやすく自分事として考えることに繋がった。自分たちの地域にも戦争の影響が及んでいたことを知り、当時の人々の苦労があつて今の地域があるということにも触れていた。概念的知識としての長く続いた戦争によって国民は大きな被害を受けたことについて地域素材を通して考えさせることができた。

## 5 本研究で得られた知見と今後の課題

歴史学習に関する児童への質問 (対象児童：男子16人 女子15人 計31人) 4 (できる/思う) 3 (ややできる/思う) 2 (ややできない/思わない) 1 (できない/思わない)	事前 事後 単位：人							
	4		3		2		1	
①歴史の学習は好きですか。	11	△12	10	▼8	8	▼10	2	△1
②自分で資料を集めて調べることはできますか。	10	△11	15	△17	6	△2	0	▼1
③自分の考えを資料などを使って説明できますか。	7	△9	13	13	10	△8	1	1
④友達の意見に対して、自分の考えをもつことができますか。	12	△13	12	▼11	7	7	0	0
⑤歴史の学習をすればふだんの生活や社会に出て役立つと思いますか。	11	△12	9	△11	10	△7	1	1

- 凡例 - △：上昇, ▼：下降

### (1) 得られた知見

- ・項目②の結果から、児童は関心のある資料について調べようという意欲を喚起できたと言える。提示した資料に加え、自分から関連する資料を探したことで、さらに追究する姿勢をもたらすことができた。
- ・項目③④の結果からは、地域素材を用いた友達との話し合いは、自分の考えをより明確にしたり、違う視点から歴史的な事象を捉えたりすることができた。また、歴史的な事象について、地域資料を基に多角的な視点から読み取り、既得する知識と関連付けながら友達に説明することができ、児童の主体的な学習に繋がった。
- ・項目⑤では、地域素材から歴史的な事象を考察したことで、自分の住む地域も歴史の舞台であったことを捉え、自分にも関わりのあることとして学ぶことができたと考えられる。

### (2) 今後の課題

- ・項目①では、肯定的な人数が減っている。地域素材を扱うことで歴史的な事象との距離は近づけたとしても地域を知ることが目的ではない。どのような概念的知識を獲得させたいのか、地域素材を単元のどこで扱うことが適切か十分に検討する必要がある。
- ・資料の読み取りの際に、児童に視点を与えず、焦点化できていない部分があった。特に思考させたい事柄について児童に視点を与える必要がある。より深く歴史的な事象について思考させられるような資料の扱い方について検討していきたい。

## 参考・引用文献

- 加藤章監修 下西善三郎編『十返舎一九・越後紀行集〈第3巻〉越後紀行』郷土出版社、1996年、pp.8～9、70～71  
 田村学『深い学び』東洋館出版社、2017年、pp.43～45  
 堀田幸義・堀田理永「小学校の歴史教育における地域教材の活用と主権者意識の醸成」『宮城教育大学紀要』第53号、2018年、pp.119～137  
 松岡貴徳「思考力を育てる社会科授業の創造」、『教育実践研究』第15集、2005年、pp.37～42  
 丸山雄一郎「歴史的な事象を自分事として捉え、多角的な視点から課題を解決する児童の育成」『教育実践研究』第32集、2022年、pp.37～42  
 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版、2018年、pp.18～19